



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国のカルト問題研究集会に参加して
Author(s)	櫻井, 義秀
Description	『中外日報』2008年1月19日掲載
Citation	中外日報
Issue Date	2008-01-19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35590
Type	article
File Information	sakurai-4.pdf



表 研究報告表題・報告者一覧

1	カルト研究の社会科学的方法論	Eileen Barker (イギリス)
2	カルト研究－比較文化の視点	Xi Wuyi (中国社会科学院)
3	カルト類型論	Wang Liu'er (中国社会科学院)
4	淫祠論	Yan Kejia (上海社会科学院)
5	カルト団体の概念と合法性	Zeng Chuanhui (中国社会科学院)
6	現代中国における民間信仰・新宗教・類似宗教	Gao Shining (中国社会科学院)
7	台湾新宗教におけるスピリチュアリティ	Zheng Zhiming (台湾)
8	韓国における新宗教の伸張とその研究動向	Jin Xun (北京大学)
9	韓国における終末論の形態とその起源	Kim Bang Ryong (韓国)
10	現代日本のカルト問題	Sakurai Yoshihide (日本)
11	現代西欧におけるカルトの特徴	Feng Chunfeng (中国社会科学出版社)
12	リスク対処：健康問題に関わる新宗教の研究	Gong Liren (中国社会科学院)
13	異端の基準と異端防止策	Lee Dae bokv (韓国)
14	現代中国におけるキリスト教異端の研究	Cao Shengjie (中国カソリック協議会)
15	現代インドにおけるカルト	P. Radhakrishnan (インド)
16	タントラ・ヨーガ・グルーヒンドゥーとカルト	Qiu Yonghui (中国社会科学院)
17	建設と破壊－仏教とカルトの違い	Minghai (柏林禅寺住職)
18	カルトリハビリセンター運営の諸問題	Inge Mamay (ドイツ)
19	新宗教と反カルトによるサイバー・ウォー	Douglas E. Cowan (カナダ)
20	法輪功信者に対する心理学的研究	Wang Wenzhong (中国社会科学院)
21	文化的敵対者の構成と暴力－人民寺院の事例	Rebecca Moore (アメリカ)
22	カルトと社会的緊張	Luo Weihong (上海社会科学院)
23	台湾における新宗教への法的規制とその影響	Lin Duan (台湾)
21	破壊的カルトへの刑法的規制の比較検討	Qu Xuewu (中国社会科学院)

中国のカルト問題

北海道大学大学院 櫻井義秀

一 膜拜団体国際学術検討会

二〇〇七年一二月六日から八日にかけて、中国深圳市において開催されたカルト問題の研究集会に参加してきた。香港国際空港から新界、上水を経由して羅湖の税関を通り、車で一時間弱のところに深圳市がある。一九八〇年まで小城镇に過ぎなかった深圳市は、鄧小平により経済特区に指定されてから広大な工業団地や港湾施設（貨物取扱高世界第四位）を建設し、人口一千万人を超える大都市となる。中国で最も地価が高い都市とされる。

偉大な政治家、鄧小平の宿泊施設跡に建設したという会場の五洲賓館の窓から、オフィスビルやホテル、コンドミニアム等の高層建築群を眺めた。筆者の居住する良くも悪くも落ち着いた札幌市と比べざるをえなかった。この二〇年で中国はどれだけ変わったのかと。

さて、今回は北京大学の金勲教授の紹介で中国社会科学院から参加の依頼を受けた。私の場合旅費は自分持ちで、参加者によっては完全な招聘もあるようだ。カルト問題について広く比較文化・社会論的な観点から討議する機会を得たいというのが開催趣旨であった。

集会では、カルトの定義、類型論、新宗教の研究方法論という基礎的な議論から、各国の新宗教・カルトの現状分析、信者の心理やカルト団体への司法的対処まで含む非常に広範な論議がなされた。筆者は、オウム真理教（現アーレフ）、統一教会という典型的なカルト問題、摂理他の擬装団体によるキャンパス内勧誘、占いやスピリチュアル・ブームという日本のカルト問題を報告しておいた。各研究報告の内容は表を参照いただきたい。

会議は一人につき二〇分発表一〇分質疑の形式で進められ、学会の研究報告に等しい。中国と台湾（二名）の研究者は英語ができて中国語で発表・質問する。韓国の大学教師と牧師の二名は中国語の通訳を同行。英語圏はイギリス、アメリカ、カナダ、インド、香港が一名ずつ。ドイツ人と日本人の私だけが英語使用のためフラストレーションを貯めた。

中国語で議事を進めるやり方にはさすがである。確かに中国語は国連の公用語であり、最大の話者（10 億強）を有する言語である以上、国際的な公用語になれる。また、社会科学の概念というのは自然科学の概念と異なり、文化や社会・政治という文脈に依存的なものである。中国語で議論することで欧米的な発想や概念を中国の脈絡に落とし込み、議論の主導権を握ることができる。日本でいう国際化は欧米化を意味するが、中国では国際社会を取り込むという発想である。やたら外来語をカタカナのままで用いて原語と日本的含意双方を曖昧なまま使い続ける日本語と、全て概念上の翻訳をして漢字にする中国語の違いに国家の歴史意識が反映されている気がする。それがまた実に興味深い効果をもたらす。

二 淫祠と邪教

中国語でカルトは膜拜団体となる。膜拜は拝礼、崇拜、儀式の意味である。だから、宗教一般に用いられるのはもちろん、iPod 膜拜ということで熱狂ぶりを示すことにも使われる。これはラテン語 *cultus* 由来の英語 *cult* の意味に近い。しかし、インターネットで検索

すると、膜拜団体（中国語は膜拜団体）二四四、〇〇〇例中、上位一〇〇の大半はカルトの現代的用法である破壊的カルト（destructive cult）の意味で用いられ、わざわざ邪教と言ひ換えているものも多数ある。なお、邪教の方が膜拜団体よりも一桁用例が多い。

淫祠（淫祀）と邪教の関係を中国史から考察した Yan Kejia の発表は最も洞察力に富む。淫祠とは儒教の礼、すなわち王朝の正統な礼拝の様式から外れた儀礼を指し、古代より地方の精霊崇拝が問題視され、道教の影響を受けた祭儀や神霊の観念も淫祠として統制の対象となったものがある。中央の政治権力の及ばないところで淫祠が盛んになると、主催者が祭祀集団の域を超えた反政府的集団（邪教）を作り蜂起する可能性があったからである。

広大な領土、膨大な人口の国家であれば、言語・文化・宗教も様々である。歴史上、言語・文化・宗教伝統ごとに民族ができた。ところが、帝国が数千年にわたって続いてきた中国は一つの国家であり、政治エリートから民衆へ、中央から地方へと常に啓蒙的な指導がなされた。その都度、淫祠が問題視され、邪教は取り締まられた。しかし、現存する宗教民俗や王朝を揺るがす大規模な宗教運動（近くは白蓮教の乱、太平天国の乱）の例をみても、中央による統治に容易に従うような民衆ではなかったことが了解される。

三 国家と宗教

淫祠・邪教を批判する言辞は、過度で不適切な祭儀による妄信、生活破綻、社会秩序を混乱せしめたことであった。現在の膜拜団体に対する批判の内容も基本的には同じである。

ところで、適切な祭儀や信仰とは何か。宗教と妄信の違い、正統と異端という護教的な議論は僧侶と牧師によってなされたが、主要な議論ではない。生活の破綻という言い方も、信者側と非信者側で意見が分かれる可能性がある。社会秩序を乱すという評価には、誰が秩序を定め、逸脱を統制するのかという問いが出される。英国・北米の宗教社会学では、カルト問題とは反カルト運動により社会的に構築された新宗教批判であるという定説がある。本集会でもこの原則を確認し、過度な批判・対応こそカルトの暴力（集団自殺や攻撃）を招くという見解が彼らより出された。社会科学的啓蒙が西欧から発せられたわけだ。

それに対して間髪入れず、社会秩序は恣意的なものではなく、法に定められたものである。人権侵害や社会秩序の破壊は法に反しているため問題だという見解が中国の法学者から出された。確かに、法は当該社会の秩序観念（自然法や慣習法）を反映したものであるし、議会による承認を経たものであれば国民により支持された社会秩序とみなせるだろう。

膜拜団体の定義・評価をめぐる論争には、法輪功をどう扱うのかという問題がリンクする。一九九二年に李洪志により創始された法輪功は国内で急速に教勢を拡大したが、一九九九年七月に中国民政部当局により不法組織と認定され、公安部による活動禁止の布告が出された。中国政府の宗教弾圧を批判する法輪功及び国外の人権団体と、中国政府と中国社会科学の研究者たち、及び政府公認の宗教界の見解は大きく分かれる。法輪功の学習者は一億人とも言われるが、信仰の熱意や教勢が中国社会では過度と判断されていることは確かである。中国の場合、宗教政策への考察抜きにカルト問題は考えられないだろう。